

外国人留学生の書いた日本語作文の分析 その2

－ベトナムからの留学生の場合－

馬場 良二（日本語教育学）

2006年の『文彩』第二号では、ニュージーランド国籍の華僑の留学生が書いた日本語作文を分析した。今回は、外国人留学生の書いた日本語作文の分析の第2弾で、ベトナムから来た女子留学生の作文を見ていく。

熊本学園大学は交換留学制度が充実していて、世界の数多くの大学から1年間の留学で留学生が来る。今年のクラスには、韓国の大田大学から1人、中国は深圳大学から2人と北京第二外国語大学から1人、そして、ベトナムはハノイ国家大学から1人。この作文の学生はハノイ国家大学からの留学生で、日本語を専攻する日本語科の3年生である。

日本語を専攻しているとはいえ、作文を書いてもらったのが4月の終わり、学年は9月始まりだろうから、日本語を勉強し始めて2年半ほどで書いたことになる。

来日してひと月もたっていないにしては流暢である。エリート大学の優等生に違いない。作文の課題を出したときに示した原稿用紙の使い方を忠実に守っている。配布した例をつぶさに見たようだ。字が丁寧できれいである。間違いらしい間違いはほとんどなく、あっても、意味はわかるし、第一文章が面白い。弟を「親友」と言ってみたり、おもしろくする工夫をしている。

2ページの中ごろ「けんかするからこそ、親しくなるのではないでしょうか」にある「一からこそ、」の使い方は堂に入っている。文法項目として使いこなすのが難しいものだとは思わないが、要領よくはさんであるので、文章全体が見栄えがする。

作文の最後にある「いてくれた弟」は「いてくれる」でもいいところだ。「いてくれた」だと「もういてくれない」ような感じにもなってしまう。「る」と

私の大好きな人

人間にと、一番大切なのは友達だと思います。私も子供のころからの親友がいます。その親友を思うたび、心が温かくなります。親友は男の人で、年下の人です。親切な人ですが、気が短いところもあります。何か困ったことがあるとすぐかんかんに怒ります。こしまいます。ある日、夢見るような顔をしている彼に「このころ、いつもにこにこしているね。お、恋人ができたの。」と冗談を言ったら、すぐに顔が赤くなった彼は私をさぐってこしまいました。すごく痛かったのを、立ちどかいくういで、そのままに座ってしまいました。「ひどい人だ。これから、決して彼に話なんがかけない。」と思いましたが、彼は「どうしたか、大丈夫。」と何回も聞いて、その様子をためいた顔を見ると、思わず笑い出しこしまいました。

「た」の微妙な違いに本人も悩んだに違いない。そして、今、この日本で身近にいないことを言いたかったのだろう、「いてくれた弟」としている。

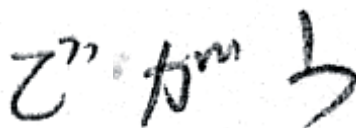
作文なのに全体的に話しかける感じ、スピーチ調である。どうも、留学生にとって作文調というのはむずかしいらしい。教室で習う日本語からスピーチ調は近いが、作文調は遠いようだし、話しかける文体というのは形として明確なのだが、作文らしく書く作法というのは目に見えにくいのもかもしれない。「スピーチ」にはふれたことがあるが、「作文」にはふれたことがあまりない、ということも考えられる。

2ページの第2段落の最初の文「この話を聞いて彼が私の恋人だと思っているでしょうか」は、読者に問いかけている。作文は読み手がいるからこそ作文なのであるが、その読み手に問いかけてしまっただけではいけない。同じ段落の「しかし、けんかするからこそ、親しくなるのではないのでしょうか」は、形は疑問だが、自分の考えを一般論として提示しているのもであって、読者に問いかけているのではない。同じ形式であっても、作文の作法にふれないものと違反するものがある。

作文全体で、どうしても直さなくてはならないのは、2ページの下から3行目、「どうしたか」ぐらいだろう。「ます」のついた場合、「どうしました？」でも「どうしましたか？」でもいいのだが、「ます」のない場合「か」をつけてはならない。「どうした」ではあまりにぶっきらぼうなら、「どうしたの」であろう。

わが身を振り返ると、字はこれで充分だが、こまかいことを言えば、二三気になる点がある。

ひらがなの濁点と「う」、それに、漢字の「友」と「良」だ。濁点は「で」と「が」の場合だけ、特徴がある。ここに拡大したのは、1ページ下から8行目「できた」の「で」と1ページ6行目「親友が」の「が」である。不思議なことに「で」と「が」の濁点は一般的でないが、それ以外の濁点は見慣れた濁点である。「で」のほうは、英文にあらわれる引用符号の「”」に近いし、「が」の濁点は「か」の第三画と一緒につながって「m」のようにになっている。ひらがなごとに濁点に個性が出るというのはおもしろい。私たちの書く濁点もひらがなごとに



した。今まで、よくこのようにけんかしているが、すぐ仲直りします。彼とはますます仲良くや、こいます。日本に来て、彼と離れて本当に寂しいです。

この話を聞いて彼が私の恋人だと思、こい
るでしょう。実は弟です。お姉ちゃんはい
つも弟とけんかしていますね。しかし、けん
かするからこそ、親しくなるのではないでし
ょうか。弟は掃除も料理も大嫌いです。私
が病気になるかかったとき、掃除も料理も洗濯も
やってくれました。彼の料理、こほとんど焼
きすぎた焼き肉とか塩辛いおかつなどですが、
私にと、ここの料理は最高です。

いつもそばにいてくれた弟に「ありがとう」と
言いたくて、弟が私の大好きな人です。

違っているのだろう。

「う」は六つあらわれている。そのうちの五つ目、2ページの9行目の「う」は「5」の横棒がぬけたような形をしている。2ページの最初の行の「う」もこれに近い。濁点と異なり、「う」の場合はこの二つだけがちょっとおかしな形となっている。

漢字では、1ページ第2段落の「親友」の「友」、2ページ3行目の「良」がちょっと気になる。「友」は第二画が左に流れた「支」のようだし、「良」は第一画の点がやはり左にむかって流れすぎている。

1ページに「何か困ったことがあるとすぐかんかんに怒ってしまいます」とあるが、冗談を言ってなぐられたとあるから、これは「気に入らないこと」と言いたかったのだろう。

同じ1ページの下から6行目「**立てない**くらい」とある。これだと、座ったか横になっているかの姿勢から「立ちあがることができないうくらい」という意味になる。日本語の「立つ」は立っていない状態から立っている状態に移行するその変化を示すのであって、立っている状態は示さない。立っている状態を維持できないことを言いたいのであれば、「**立って**いられないくらい」とすべきである。

「そのままに座ってました」は、痛くて立ってられず、かと言って、椅子やベッドのところまで移動することもできず、「その場に座りこんでしまいました」と言いたいのだろう。「そのまま」は、「移動することなくその場で」という場面や意味で使うことがあるので、ここで使ったのだろう。この意味で「そのままに」を使うことはないと思うが、「そのまま」と「そのままに」との両形式ともに存在しているのは確かで、二つの違いがよくわからぬまま「そのままに」のほうを選択したのだろう。どうして「そのままに」のほうを選択したのかはわからない。「まま／ままに」以外にも、「(二つ)とも／ともに」、「あまり／あまりに」、「以外／以外に」、「すぐ／すぐに」、「その上／その上」など、副詞か副詞に似たような機能を持つ語に「に」がつく場合がある。この「に」の意味と用法がわかれば、この学生が「そのままに」のほうを選んだ理由もわかるかもしれない。

この学生は、「動詞+てしまう」という表現がすきなのか、2ページの作文で

3回使っている。「かんかんに怒ってしまいます」「なぐってしまいました」「笑い出してしまいました」である。「動詞+てしまう」の意味というのは、「この本はもう読んでしまった」とか「宿題をやってしまったら、ゲームをしてもいい」のように何かの動作の「完了」である。失敗したときに、「こわしてしまった」のように使うが、失敗ややってはいけないことをやったときに使う表現、というわけではない。どうもその辺をとらえ違えているようで、「彼は私をなぐってしまいました」のような表現をし、反対に、「その場に座りこんでしまいました」とはならないのだろう。

1 ページ、下から9行目「このころ」。「このころ」のままだと、過去のある時期を客観的に指し示していることになる。文脈からして「このごろ」の間違いだろう。「ころ」はある時期を漠然と指し示す自立した語であり、一方、「ごろ」はほかの語について複合語を形成する言語要素である。だから、「子どもこのころ」「わかかったあのころ」であり、「五時ごろ」「明け方ごろ」となる。「ころ」も「ごろ」も漢字なら「頃」だし、日本人でもその違いを意識していない。しかし、「ころ」と「ごろ」とは別々の言語要素なのである。

1 ページの下から4行目、「決して彼に話**なんか**かけない」もどこか舌足らずである。この「なんか」は「あんなやつと**なんか**口もききたくない」の「なんか」と同じであろう。どちらも否定文で使われる。ただ、例文では「あんなやつと」に後接して、「あんなやつ」に対する軽蔑のニュアンスを付け加えているが、作文では軽蔑のニュアンスを付け加える必要のない「話」に後接してしまい、ちぐはぐである。「なんか」を使うなら「彼」か「彼に話しかける」こと、に後接させるべきである。前者なら「決して彼**なんか**に話しかけない」となり、後者なら「決して彼に話かけ**なんか**しない」となる。より自然な話し言葉にするなら、「決して彼に話かけ**たり****なんか**しない」と「たり」をいれるべきである。

「彼は「どうしたか、大丈夫。」と何回も聞いて、その慌てふためいた顔を見ると、」だと、「彼」が誰に聞いたのかははっきりしない。日本語では「私」というのは基本的に言わない。だから、「彼は「どうしたか、大丈夫。」と何回も私に聞いて」とする必要はない、「私に」をいれると、翻訳調になり、日本語としては冗長になる。ではどうするかというと、「聞いて」を「聞いてきて」とすればよい。「聞く」動作の方向を明示すればよいのである。「下通りを歩いていると黒服

の男が話しかけました」では、尻切れトンボであるが、「私に」などはいない、「話しかけてきました」とすれば、文の体裁が整うし文意が伝わる。

この**テキマシタ**は「話しかける」という動作の空間的な方向、外部から話し手への方向を示している。同じ**テキマシタ**には時間的な方向を示すものがある。過去のある時点から話をしている現在の時点までの期間、その時の流れを示す。グループ・ジャマシイの『日本語文型辞典』1999、くろしお出版、には、「V-てくる<継続> 変化や動作が過去から続いて今にいたることを表す」とあり、「この伝統は5百年も続いてきたのだ」「17歳のときからずっとこの店で働いてきました」などの例があげられている。2ページの最初の「今まで、よくこのようにけんかしているが、すぐ仲直りします」は、まさにけんかという「動作」がどこものころから「続いて今にいたることを表している」のであり、「今まで、よくこのようにけんかしてきましたが、すぐ仲直りしてきました」とすべきである。さらに、述部の「てきました」は繰り返す必要がない。「今まで、よくこのようにけんかしましたが、すぐ仲直りしてきました」とするとすっきりした日本語となる。

2ページの「お姉ちゃんはいつも弟とけんかしていますね」は、作文を書いた本人によると、姉弟げんかの一般論だそう。たしかに、過去を示していない文というのは、「あかちゃんをよく泣く」「梅雨時はたべものがすぐにいたむ」のように、一般論をあらわしうる。しかし、この作文の文脈では、個別の事象なのか一般論なのかははっきりしない。ものごとの定義を一般論として提示するには、「—というのは—ものだ」という言い方がある。この言い方を勉強していなかったか、忘れていたのだろう。「お姉ちゃんというのはいつも弟とけんかするものですね」とすべきである。

2ページの終わりのほうに「彼の料理ってほとんど焼きすぎた焼肉とか塩辛いおかゆなどですが」という文がある。作文に「って」とうのは不適だと考えるなら、「彼の料理というのは」とすべきである。

16世紀の日本で活躍したイエズス会士、João Rodriguez は、その著 *ARTE DA LINGOA DE IAPAM* で日本語について「(名詞や動詞を) 組み合わせることによって、簡潔に力強く言い表すことができる」と述べている。日本語の動詞は、その運用にあたってうしろに動詞や補助動詞、助動詞などが次々に接続することが知られている。1ページでの訂正の「立ってられない」は補助動詞の「いる」と

可能の助動詞「られる」が「立つ」と組み合わせられているし、その次の「座りこんでしまいました」では動詞「座る」に別の動詞「こむ」が後接して複合動詞「座りこむ」が形成され、さらにそこに「て」「しまう」「た」が続いている。「何回も聞いてきて」「すぐ仲直りしてきました」の場合は、「くる」が動作の空間的な方向やものごとの時間的な流れ、継続性を示す。これらの要素がないと日本語としてはものたりないか、不完全である。それをこの著者は「立てない」「座ってしまいました」「聞いて」「仲直りします」と書いている。一方、2ページの後半では、「私が病気にかかったとき、掃除も料理も洗濯もやってくれました」「いつもそばにいてくれた弟に」と授受表現のテクレルをじょうずに使っている。この学生は日本語の優秀な使い手である。

動詞のテ形には大きく二つの用法がある。動詞と補助動詞とをつなぐ役割（スワリコンデシマウ、オシエテアゲル）と、二つの文をつなぐ中止法とである。この作文には、テ形の中止法が6回あらわれている。

「恋人ができたの。」と冗談を(1)言って、すぐに顔が赤くなった彼は私をなぐってしまいました。

「どうしたか、大丈夫。」と何回も(2)聞いて、その慌てふためいた顔を見ると、思わず笑い出してしまいました。

日本に(3)来て、彼と(4)離れて本当にさびしいです。

この話を(5)聞いて彼が私の恋人だと思っているのでしょうか。

いつもそばにいてくれた弟に「ありがとう」と(6)言いたくて、弟が私の大好きな人です。

テ形の中止法、あるいは、接続助詞の「て」それ自体には明確な意味がない。「て」をはさんだ前後の二つの文が示す事柄が、二つの文の意味的な関係を決める。上記の(1)は「友達の悪口を言って、先生にしかられた」のようにある現象の原因や理由を表す、あるいは、「朝起きて、顔を洗って、・・・」のように動作や事象の継起を表していると考えられる。(2)を「聞いてきて」にかえれば、やはり、原因・理由か継起と考えられる。(3)も原因・理由か継起、(4)は原因・理由だろう。(5)も原因・理由か継起。(6)は原因・理由でも継起でもないだろう。「手をつないで歩く」のように、ある動作、事象がなされるときに付随してあらわれる動作、

事象を示している。これを様態とよぶ。様態の用法を、この学生は、言いたいことの前置きのようにして使っている。言いさしのような感じでテ形でとめ、そのあとに言いたいことを続ける、といった使い方である。(3)(4)以外、そんな感じである。なんだかぼんやりした使い方で、日本語教育の文法から見るといくぶんあやふやである。しかし、日本語ネイティブの書く日本語もこんなものだし、非文法的とは言えない。

最後に、姉が病気にかかったときに、弟が家事と看病をする、ということは二人の両親は共働きなのだろうか。本人に確認するのを忘れてしまった。